

硫黄島レポート

農学研究科 1年 中川 舞

本講義の研修で訪れる島の名前を聞いて私の頭に最初に浮かんだのは、東京の硫黄島だった。映画の舞台になったり、最近では世界遺産にも登録されたりしている。だが、今回研修に行ったのは、鹿児島県鹿児島郡三島村(竹島、硫黄島、黒島の3島)の硫黄島である。

その名のとおり、硫黄岳から多量の硫黄を噴出している(硫黄岳から噴出した硫黄が蓄積している部分が黄色くなっている)島であり、平安時代には硫黄の産地として重宝されていた島であった。チムニーという海底の噴出孔から湧き出た温泉も多く存在する。島周辺の海底には鉄が蓄積しており、海がオオドイロに変色して



いるのもこの島の特徴である。鉄分を多く含むので海水の pH が低い、魚は生息している。また、日本で最も人口(378人)の少ないジオパーク認定島でもある。島には自然を見て、感じて、触れ、そして学ぶことができる場所が多く存在する。今回の研修では、鹿児島県三島村役場の岩根さんにガイドをしてもらいながら、硫黄島について勉強させてもらった。

この島は 7300 年前の大噴火により形成された鬼界カルデラの端に位置し、硫黄島に到着したときに見える 600m の崖が印象的である。これは沈降により形成されたものであり、

ほかにも多くの崖を島の至るところで見ることができる。車で移動中、むき出しで何層にも重なった地層を見ることができた。地層から、この島では、大噴火後に火山灰が降り積ったこと、マグマだまりが大噴火により勢い良く吹き出したこと、流れの早い火砕流が流れ出したこと等が起こったことが分かっている。この地層を横目にカルデラを登っていくと、放牧牛を多くみることができる。この島の土壌は pH が高いため、農作物は趣味程度にしか栽培されていない。一方で、畜産が盛んに行われている。広大な放牧地が整備されており、ストレスをかけることなくこの島の人口よりも多い牛が飼育されていた。これらの牛は、「みしま牛」(3島すべてで飼育されている)というブランド牛として売り出されている。島の牛を食す機会はなかったが、この広大な島で悠々を飼育されている牛はおそらく上質であろう。ところで島に生息している動物は、飼育牛以外に、島ヘビ、ウミガメやクジャクのみで、種が少ない。種が少ないのは島の性質であるが、野生のクジャクが生息しているのは珍しい。これは、過去にヤマハ楽器の関連会社がリゾートホテルをオープンさせたが、経営不振から閉鎖に至り、その際に連れてきたクジャクが野生化したのだという。



カルデラの頂上へと登っていくと、島全体を見渡せる展望台、岬にたどり着く。恋人岬公園や城ヶ原牧場からの景色は絶景である。展望台からは硫黄岳やカルデラ地形を見ることができ、地球が生きていることを感じるができる。また、海の色の違いにも驚かされる。島周辺の海の色は、鉄分によりオオドイロであるが、その外側の海の色は綺麗なアイイロである。今回は海の色がはっきり分かれていたが、風向きによって色が混ざり、薄い水色になったり、模様ができたりと日によって海の見え方は全く異なるということであった。



海沿いには自然の温泉がある。主に3つの温泉(東温泉、坂本温泉、穴之浜温泉)があり、すべて無料で入ることができる。今回入浴したのは東温泉であった。温泉のすぐ横には海があり、波音を聞きながらはいる温泉は日ごろの疲れを癒してくれるものであった。夜になると満開の星空を見ることができ、これ以上にはないほどの癒しであった。



夕方からは1994年に硫黄島に伝わったジャンベという打楽器を演奏した。ジャンベは西アフリカ伝統の



打楽器であり、日本の太鼓に似ている。しかし、太鼓とは異なり、ジャンベは手のひらや指を使って演奏する。低い音から高い音まで、手の使いかたを変えて、たたき分ける。一見簡単そうに感じるが、実際に叩いてみると高い音を出すのが難しい。初めて叩くリズムも難しかった。だが、叩ける叩けないに関係なく、皆と一緒に叩いて楽しむことができた。このジャンベの演奏は、硫黄島に着いたときに、また硫黄島を離れるときに、聞くことができる。

ここで、今回この島について学び、実際に見て触れたことを農学的観点から考察してみようと思う。前述したが、硫黄島における農作物生産は、この島の人々が趣味程度にしか栽培されていなかった。自給自足では生活していけないので、鹿児島島本土から送られてくる物資に頼っているのが現状である。しかし、畜産には盛んに行われており、「みしま牛」として売り出している。みしま牛の生産は竹島、硫黄島、黒島の三島村全島で行われている。ここで疑問に思うことが一つある。硫黄島では、今後ツアーや観光を推進していくという話を聞いたが、自給自足では足りず物資に頼っている中で、旅行客に提供する食事はどうするのであろうか。観光旅行をする際、やはり食を楽しみの一つとしている人も多いと思う。旅行客がフェリーで島を訪れる際に一緒に物資として運び込むのだろうか。もしくは、三島村を回り、動植物が豊富な黒島で食を提供するのだろうか。しかし、フェリーの運航便が少ないので後者の案は無理であると考えられる。そうなると、三島村ならではの食はあまり期待できないので

ここで、今回この島について学び、実際に見て触れたことを農学的観点から考察してみようと思う。前述したが、硫黄島における農作物生産は、この島の人々が趣味程度にしか栽培されていなかった。自給自足では生活していけないので、鹿児島島本土から送られてくる物資に頼っているのが現状である。しかし、畜産には盛んに行われており、「みしま牛」として売り出している。みしま牛の生産は竹島、硫黄島、黒島の三島村全島で行われている。ここで疑問に思うことが一つある。硫黄島では、今後ツアーや観光を推進していくという話を聞いたが、自給自足では足りず物資に頼っている中で、旅行客に提供する食事はどうするのであろうか。観光旅行をする際、やはり食を楽しみの一つとしている人も多いと思う。旅行客がフェリーで島を訪れる際に一緒に物資として運び込むのだろうか。もしくは、三島村を回り、動植物が豊富な黒島で食を提供するのだろうか。しかし、フェリーの運航便が少ないので後者の案は無理であると考えられる。そうなると、三島村ならではの食はあまり期待できないので



はないかと考えられる。山菜などは豊富であると思われるので、山菜を使った料理や、地熱を利用した蒸し料理なども提供でできるのではないかと思う。しかしながら、今回2日間、硫黄島研修に行き、食事のことはあまり気にならなかった。ツアーや観光に行く上で、食に関しては期待せずに行けばいいのかもしれない。実際、今回研修を行うにあたり、食事は最低限の量を持ち込んだだけであったが、苦ではなかった。それよりも、多くの自然を体験して得られた影響の方がかなり大きかった。

今後、観光ツアーやしおかせ留学などを活発的に行っていくとのことであったので、硫黄島の魅力を多くの人に知ってもらえるであろう。インターネットやSNSで見ただけではなく、実際に現地を訪れて肌で感じてほしいと思う。そこで、硫黄島を盛り上げる意味で、ツアーに関して一つ提案がある。今回、硫黄島をめぐり、ハート型の地形や模様のあるものをいくつか観察することができた。私が観察できたのは3つであった。1つ目は、大浦港である。上から見ると若干ハート型であった。自然の力によって作られた地形はとても迫力があり、ここでもまた地球が生きていることを実感できると思う。私たちが大浦港を訪れた際、ウミガメが産卵のために港へと迷い込んでいた。今回訪れた時期がウミガメの産卵時期であったため、見ることもできたのかもしれない。また、大熊神社にはハート型の石があった。自然の力で作られたのであろう、その石はハート型の石より小さい石の上にバランスよく乗っていて、誰かがわざと運んできたのではないかと思わせるようであった。そして、ジャンベ演奏の衣装(アフリカの生地)にハート模様があった。ハート模様は世界共通で、たまたま生地にハートが描かれていただけかもしれないが、ほかにも硫黄島には、恋人岬公園や幸せの鐘など、カップルを目的としたツアーを作ることができるのではないかと感じた。また、島婚なるものが行われたことがあると聞いたので、今後そのような婚活パーティーが開催される場合には、プランの一つにこれらの場所をめぐることも組み込んでみたら、面白いかもしれない。

